



TITLE:

# 概念としての帝国主義

AUTHOR(S):

静田, 均

---

CITATION:

静田, 均. 概念としての帝国主義. 経済論叢 1959, 84(1): 1-17

ISSUE DATE:

1959-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/128920>

RIGHT:

# 經濟論叢

第八十四卷 第一號

---

概念としての帝国主義……………	静 田 均	1
租税と利潤の費用化……………	島 恭 彦	18
社会保険概念についての一考察……………	与 田 枏	25
ドイツ民主共和国における社会主義 工業管理制度の発展について……………	金 鍾 碩	44
課業設定の評価……………	小野寺 孝 一	61
アメリカの産業構造と八大財閥の変遷 ……………	金 田 重 喜	72
社会主義再生産の特有法則と経済的範疇(一) ……………	長 砂 実	93
書 評		
F. E. ハイド『ブルー・フェネル』……………	山 田 浩 之	104
京大経済学部創立四十周年記念記事……………		109

---

昭和三十四年七月

京都大學經濟學會

# 概念としての帝国主義

静 田 均

『資本主義の最高の段階としての帝国主義』の第七章は、『資本主義の特殊の段階としての帝国主義』と題し、それにさきだつ六章の締めくくりをつける意味で、帝国主義の概念規定を与えると同時に、一転してカウツキーに決戦をいどみ、強引な戦法で対決をせまる。いきおい、われわれもしばらくのあいだ帝国主義の概念規定の問題と取組まねばならぬ。

『帝国主義は』、とレーニンは書いている。『資本主義一般の基本的特質の発展とその直接の継続として生じたものである。だが、資本主義は、その発展の一定のきわめて高度の段階でだけ、すなわち資本主義の若干の基本的特質が、その対立物に転化しはじめたときに、また資本主義からより高度の社会『経済制度への過渡期の諸特徴が、あらゆる方面にわたって形成され、あらわになったときに、はじめて資本主義の帝国主義となったのである』と（第七章）。この過程で経済的に基本的なのは、資本主義的自由競争が資本主義的独占に取ってかわられたということである。独占は自由競争の直接の対立物にほかならぬ。独占は生産と資本の集中を意味し、またそれと融合した

巨大銀行の成立を意味する。自由競争の独占への転化は、しかし競争の排除を意味するものではなく、むしろそれとならんで存在し、いくたの鋭くて激しい矛盾を生みだすことが強調される。

そこで端的に帝国主義を定義するとしたら、どうなるであろうか。レーニンはいう、『もし帝国主義のできるだけ簡単な定義を与えなければならぬとすれば、帝国主義とは資本主義の独占段階であるというべきであろう』と(同上)。この定義はいちおう要をえているとはいえ、あまりに簡潔すぎて、必ずしも十分に意をつくしたものとはいいきれぬ憾みがある。もちろん、どんな定義でも、現象の完全な発展におけるその全面的な連関を包括することは、至難であろう。しかしレーニンは、あらゆる定義に附きものの制約的・相対的な意義を考慮にいれながら、五つの基本的な標識を織り込もうと試みる。(1)生産と資本の集中が高度の発展段階に達し、独占が決定的な役割を演じていること、(2)銀行資本と産業資本が融合して金融資本が成立し、それを基礎として金融寡頭支配が行われていること、(3)商品輸出ではなく、資本輸出がとくに重要な意義をもつにいたったこと、(4)国際的な独占が成立して世界を経済的に分割していること、(5)資本主義列強による地球の領土的分割が完了したことが、すなわちそれだ。

かくてレーニンは帝国主義のより精細な定義を与える。いわく、『帝国主義とは、独占と金融資本との支配がつくりだされ、資本の輸出が顕著な重要性をもつにいたり、国際トラストによる世界の分割がはじまり、資本主義列強によるいっさいの領土分割が完了しているところの、資本主義の発展段階である』と(同上)。これは非常に有名な定義であって、ひろく一般にうけいれられているから、今日ではほとんど常識と見做してもよからう。ただ、ここでわれわれの特に注意したいのは、さきの簡潔な定義であれ、のちの精細な定義であれ、根本において変りがなく、両者は二つの共通点をもつということだ。第一、いずれも帝国主義を主として経済的側面から把握しようとし

ている。第二、いずれも帝国主義を資本主義発展の特殊なある段階として規定している。ところでレーニンは、同じ箇所、これは純経済的概念であり、もし観点をかえれば、別の定義をくだしうる旨を附記している。その意味で、この定義は、必ずしも帝国主義の全貌を描きつくしたものと見ることはできないであろう。

さて以上の定義に関連して、スウィーギーの見解を顧みることは、おそらく無益ではあるまい。スウィーギーによると、『帝国主義は世界経済の発展における一段階』であって、つぎのような五つの特徴をもつ。(a)先進資本主義諸国が、工業製品の世界市場について競争の立場にたつこと。(b)独占資本が資本の支配的形態であること。(c)蓄積過程の諸矛盾が成熟し、資本輸出が世界経済関係の顕著な特徴をなすこと。(d)世界市場における苛烈な競争が、死活的な競争と国際的な企業結合とを交互に発生せしめること。(e)主要資本主義列強（およびそれらの衛星諸国）間における世界の「未占有」部分の領土的分割がおこなわれること。(The Theory of Capitalist Development, 1942, p. 307. 中村金治訳『資本主義発展の理論』昭和二十六年 四一三ページ)。

以上は、スウィーギー自身ことわっているように、レーニンの定義に若干の修正を加えたものである。レーニンは明かにスウィーギーの(a)を前提としており、スウィーギーはレーニンの(b)を省略した。この点にかなしてスウィーギーはいう『「金融資本」という概念の中でとるべきものは、大資本家の寡頭支配ということを含めて、すでにわれわれの「独占資本」という概念の中に含まれている。したがってレーニンの第二の特徴をそのままにしておくことは、蛇足であるか、誤解を招くかのいずれかであろう』と(L. C. p. 308. 訳本四一四ページ)。スウィーギーの定義でとくにわれわれの関心をそそるのは、(c)と(d)である。資本蓄積過程の進行にともなう諸矛盾の展開が、国際的規模において明確に指摘され、強調されているからだ。(e)の『未占有』うんぬんが具体的に何を意味するのか、わ

たしにはよく判らない。列強による植民地の再分割を意味するとすれば、未占有は少しおかしいし、また一九世紀末のアフリカの分割に見られたような、列強による無主の地の獲得を意味するのであれば、帝國主義の起点を二〇世紀のはじめと規定するレーニンの見解と相違する、といわねばならぬ。

## 二

『特にいうまでもないことだが』とレーニンは書いている。『自然および社会における境界は、すべて条件づきで可動的なものであり、したがってたとえば何年あるいは何十年代に帝國主義が「終局的」に確立したかなどということについて論争しあうことは、まったく無意味であろう』（第七章）と。しかし帝國主義がいつ確立したかを明かにすることは、それ自体ひとつの重要な問題をなすのではなからうか。一般にはおおむね一九世紀の七、八〇年以降を帝國主義の時代と呼んでいるようである。おそらく通説といつてよからう。カウツキーもまた同様の見方をしている。これにひきかえ、レーニンは二〇世紀の初頭をもつて帝國主義の確立期と見るべきだとして、繰返しそれを強調している。このように説のわかれるのは、通説が、列強の植民地獲得競争の同時的開花をメルクマールとするのに対して、レーニンは資本主義的独占および金融資本の確立をメルクマールとするからだ。そしてここに通説と異なるレーニンの独自の主張がある。してみれば、帝國主義の確立期にかんして論争することが、無意味であるとは、けっしていえないとおもう。けれどもレーニンはどうしたわけか、敢えてこの問題に深入りすることを避けている。その代り帝國主義の定義となると、燃えるような闘志をもつて、『われわれは第二インターナショナルの時代、すなわち一八八九—一九一四年の二五年間における主要なるマルクス主義理論家K・カウツキーと論争

しなければならぬ』と意気こむのである。

レーニンはいう、『われわれの与えた基本的な思想に反対して、カウツキーは一九一五年に、いやすでに一九一四年一月に決然として立ちあらわれ、つぎのように言明した。帝国主義とは、経済のある「局面」または段階と解すべきではなく、政策すなわち金融資本によって「好んで用いられる」一定の政策と理解しなければならぬ。帝国主義を「近代資本主義」と「同一視」してはならない。もし帝国主義を「近代資本主義のすべての現象」——カルテル、保護政策、金融業者の支配、植民政策——と理解するならば、資本主義にとって帝国主義は必然であるという問題は、けっきょく「もっとも月並みな同義語反復」となるであろう。なぜなら、そう解釈すると、「帝国主義は、当然、資本主義にとって死活にかかわる必要物となることになる」から、うんぬん』。卒然としてこれを読めば、引用句の中に要約されたカウツキーの主張は、さながらレーニンにたいする批判であり、レーニンはそれにたいして反批判を加えようとの身構えを示しているかのような印象をうけるかもしれぬ。しかしそう解釈するなら、とんでもない誤解だというほかはない。これはH・クローノーにたいするカウツキーの批判の要旨なのだ。レーニンの帝国主義論のロシア版は、一九一七年の刊行であり、ドイツ版は一九二〇年になってようやく出版された。カウツキーがこの問題でレーニンと直接あたりあつた形跡はどこにも見あたらず。

これに反して、クローノーとカウツキーのあいだに論争のあつたことは、一九一四年から一五年にかけてかわされた両者の論文が、鮮かにその戦績を語っている。クローノーはドイツ社会民主党の闘士であるが、第一次大戦の勃発を契機として、中間派から右派に転向した。いわゆる社会帝国主義者のうちの有数の理論家だ。彼ははじめのうち帝国主義をば資本主義の特定の段階と規定した。反対に中間派の立場を固守するカウツキーは、帝国主義を高度資

本主義の政策であると説いた。帝国主義にかんするカウツキーの概念規定は、いささか不備であつて誤解を招きやすい欠点をもつこと、そのためクローノーやレーニンによつて假借なき批判をうけたこと、しかしそれらの批判はカウツキーの真意を捕捉しえなかつたため、的はずれに終つた嫌いがあることを、わたしはかつて指摘した（拙稿「カウツキーの帝国主義概念」経済論叢第七五巻第五号昭和三〇年）。いまそれを重ねて持ちだす必要はあるまい。問題はむしろ、クローノー対カウツキーの論争の帰結がどこに落ちついたかということにある。簡単にいえば、論争を通じて両者の見解はせばまり、クローノーは著しくカウツキーに接近し、段階ではなく政策と見ることに同意したといふ。

レーニンがこの論争の経緯と結着を知つていたであろうことは、推定にかたくない。それは、右に掲げた引用句の少しあとでクローノーを引張り出していることによつて、明かである。クローノーは最初のうち帝国主義を不可避的な段階として肯定し、支持したに反し、レーニンは逆に打倒さるべきものとして、まづこうから否認する。帝国主義にたいする態度において、両者まったく異なるにもかかわらず、なぜレーニンはクローノーの当初の主張であつた『段階』論に執着し、政策ではなく段階であると、最後まで頑強に主張してやまないのであらうか。ここに究明を要する一つの問題がある。

ところでレーニンは第八章において、『帝国主義のもつとも深い経済的基礎は独占である。この独占は資本主義的独占である』と述べ、また第一〇章では、『帝国主義はその経済の本質からすれば、独占資本主義である』、とも説いている。これをさきの定義と比較対照してみるがよい。おそらく何びとも、ニュアンスの相違に気づかずにはおれないであらう。帝国主義の経済的基礎は資本主義的独占であるとか、帝国主義の経済的本質は独占資本主義



であるとかという説明にたいしては、誰でもそれほど強い抵抗は感じないであろう。しかし、帝国主義は独占資本主義であるという表現になると、疑惑をもち、反撥を催すひとが出てくるにちがいない。現に神川彦松教授は、レーニンの見解は革命運動のために考案された戦術的理論だときめつけられているし、『国際政治学概論』昭和二年一八二ページ)、また高田保馬教授はそれをナンセンスであり、タウトローのほかの何ものでもない、と割り切っておられる(『東亜民族論』昭和四年第一章)。ともあれ、帝国主義を一義的に独占資本主義そのものと規定し、それを信奉するがぎり、帝国主義が独占資本主義いぜんにも存在するということは、考えうべからざることのように見える。かくて矢内原忠雄博士は、『非帝国主義国の帝国主義的实践』という形容矛盾にも似た説明を企てねばならぬ破目に陥られた(『帝国主義下の台湾』昭和四年一三ページ)。われわれはここに学究的良心の困惑の表情を見出す。しかし同じ第七章の中でレーニンは、こうも書いている、『もしわれわれがただに基本的な純経済的概念(前述の定義はかかる概念に限局されている)を念頭におくのみならず、資本主義の一定の段階が資本主義にたいしてしめる歴史的地位、あるいは帝国主義と労働運動の内部における二つの基本的傾向とのあいだの關係をも考慮にいれるならば、帝国主義は別な定義を下されうるし、また下されねばならぬ』と(傍点は引用者)。

### 三

われわれは前節において、帝国主義にかんするレーニンの古典的定義を見た。それは独占資本主義の同義異語であり、もっぱら経済的本質を捉えようとしたものであった。換言すれば、資本主義の最近の段階を経済面から捉えようとするだけであって、政治面に触れるところがない。そのかぎりにおいて、経済的概念であって、政治的概念

ではない、といえよう。レーニンは好んで、『近代的・資本主義的帝國主義』という表現をふりまわしている。が、もし帝國主義を独占資本主義と読みかえたとすれば、近代的・資本主義的帝國主義は近代的・資本主義的独占資本主義ということになる。これでは屋上屋を架するたぐいであつて、まったくのナンセンスに終つてしまふであらう。資本主義が資本主義的帝國主義になつたという表現も見られるが、これまた同義語の反復にほかならぬ。近代的・資本主義的帝國主義という表現を一片のナンセンスに終らしめないためには、この種の場合の帝國主義は、独占資本主義そのものではなく、むしろ独占資本主義に根ざした世界政策または對外膨脹政策という意味に解するほかあるまい。が、そうだとすると、帝國主義という言葉は、すでに政治的な概念に變つてゐることを知らねばならぬ。

レーニンは第九章『帝國主義の批判』の冒頭で書いている。『帝國主義の批判』ということ、われわれは言葉の広い意味に理解する。すなわち社会のいろいろの階級が、彼らの一般的イデオロギーと関連して、帝國主義的政策にたいしてとる態度と解する』と。ここでは帝國主義と帝國主義的政策とは、まったく同等に觀念されている。してみれば、帝國主義という用語は、レーニンにあつてさえ、けつして一義的に規定され、使用されているのではない。彼れ以外のひとびとにあつては、なおさらそうであらう。帝國主義という表現を一定の政治または政策として理解するのは、カウツキーだけに限つたことではなく、ヒルファールディングをはじめ多くの先例がある。レーニンが序文をよせた『帝國主義と世界經濟』の中で、ブハーリンはとくに註釈をほどこしているが、それによると、帝國主義は金融資本の政策であり、またイデオロギーである。それは自由主義が一方で産業資本の政策（自由貿易、等々）であると同時に、その全イデオロギー（個人の自由、等々）をも意味するのとひとしい（Imperialismus und Weltwirtschaft. Marxistische Bibliothek. 12, S. 121. Fußnote 142, 野村武一訳『帝國主義と世界經濟』昭和五年一六六ページ）。

ちなみにレーニンの序文は、一九一五年二月に執筆され、一九一七年一月はじめて発表されたものであり、ブハーリンの原著は一九一七年一月の自序をもつ。スウィージーは、帝国主義という言葉が特定の政治関係を明らかにすることから、次第にその関係を一部分として含むような全政治・経済制度を意味するようになった歴史の変遷を指摘したのち、最後に帝国主義は独占資本主義の競争期に発達した国際的な政治・経済制度であるという彼じしんの定義を与えている。これはいうまでもなく、レーニンの用語例を踏襲したものとおもわれる (The Present as History, 1953, Chapter 6, 都留重人訳『歴史としての現代』昭和二九年第六章)が、そのスウィージーによれば、社会主義という言葉は社会制度として理解しうるばかりでなく、ときにはイデオロギーを意味し、また社会運動を意味するところ (Socialism, 1949, p. 3-8, 野々村一雄訳『社会主義』昭和二六年二一九ページ)。帝国主義という言葉についても同じようなことがいえるのではなからうか。

こう見てくると、帝国主義は段階か政策かというレーニン対カウツキーの論争は、クローノー対カウツキーの論争をもういちど蒸し返すに等しく、不生産的な問題提起にすぎないように、わたしにはおもわれる。ところでレーニンはいう、『資本主義の最新の段階を帝国主義と呼ぶべきか、金融資本の段階と呼ぶべきかという、カウツキーによって惹起された用語上の争いは、まったくどうでもよいことである。呼びたいように呼ぶがよい——それは問題でない』と (第七章)。だが、これでは肝腎の焦点がぼかされてしまいはしないか。問題は、帝国主義は段階か政策かにあつたはずである。段階にどんな名称を与えるかにあつたのではない。が、そんなことには拘泥せず、レーニンはひたむきに言葉をつづける。『事の本質は、カウツキーが帝国主義の政策を帝国主義の経済から切り離して、領土併合をば金融資本が「好んで用いる」政策だといひ、かつこれにたいして、金融資本という同じ基礎のうえで

まつたく可能だという他のブルジョアの政策を對置させていることである』(第七章)。かくてわれわれは知る——もつとも本質的な問題は、階段か政策にあるのではなく、むしろ独占資本主義の段階において、帝國主義的政策は必然であり、それ以外の政策がありうるか否かにあることを。どうやら語りに落ちた恰好のようだが、結局のところ、カウツキーの超帝國主義論にたいして砲撃の照準をあわせるのが、真のねらいであるらしい。しかし超帝國主義論にかんする批判の考察は、別の機会にゆずることとして、われわれは、帝國主義の政治的側面にかんするレーニンの叙述を、もう少し追跡することにしよう。

引用の一。『帝國主義の政治的特性をなすものは、金融寡頭支配の抑圧と自由競争の排除とに関連するところの、あらゆる方面における反動と民族的抑圧の強化である』(第九章)。引用の二。『帝國主義は金融資本と独占の時代である。ところが、この金融資本と独占は、自由への熱望ではなく、いたるところに支配への熱望をもちこんでいる。あらゆる政治制度のもとでのあらゆる方面の反動、この政治の領域における諸矛盾の極端な尖鋭化——これこそ、これらの傾向の結果である。同様に民族的抑圧と併合の熱望、すなわち民族的独立の破壊(なぜなら、併合は民族自決の破壊にほかならぬから)とが、とくに激化する』(第九章)。レーニンはこれに続いて、帝國主義と民族抑圧の激化の関連にかんする『金融資本論』の一節をながたと引用している。この点にかんするレーニンの主張は、しかし、ヒルファードディングを一步も出るものではない。

#### 四

帝國主義は独占資本主義であるという命題は、レーニンによってもつとも強く打ちだされ、彼れの古典的定義の

核心となっているのだが、他方ではそうした時代的制約を抜きにした帝国主義の概念もときとして見られること、後者はコロニアリズム（植民地主義）またはエクスパンシニズム（膨脹主義）の意味に解されうることについて、わたしは他の論文で指摘したことがある（拙稿『帝国主義にかんする覚え書』京大経済学部創立四〇周年記念『経済学論集』所収昭和三四年）。念のため、第六章の中にある問題の箇所をもういちど引用して、さらに一言を加えよう。『植民政策および帝国主義は、資本主義の最近の段階いぜんにおいても、いな資本主義そのものいぜんにおいても、存在した。奴隸制度を基礎としたローマは、植民政策を実行し、かつ帝国主義を実現した。しかし社会的・経済的構造の根本的差別を無視し、または軽視した帝国主義にかんする「一般的な」考察は、不可避免的、たとえば「大ローマと大イギリス」の比較といったような空虚な駄弁または虚言に墮する。資本主義の初期の段階における資本主義的植民政策でさえも、金融資本の植民政策とは本質的に相違している』（第六章）。

これと同じような用語例は、『ユニウスの小冊子について』と題する論文の中にも見られる。いわく、『イギリスとフランスは、植民地をめぐる七年戦争でたまたまかかった。すなわち彼等は帝国主義戦争を行つたのである。（帝国主義戦争は、高度に発展した資本主義の現代の地盤のうえでも可能なように、奴隸制度の地盤のうえでも、原始的な資本主義の地盤のうえでも可能である）。……このことからして、帝国主義の概念を千篇一律に適用し、この概念から民族戦争の「不可能性」を導きだすことが、いかに馬鹿げているかがわかる』（*Samtliche Werke, Bd. XIX, S. 218-9*、『帝国主義と民族・植民地問題』国民文庫 三九一四〇ページ）。いうまでもなく、これはローザ・ルクセンブルクにたいする批判の一節である。

さて以上の引用から明かに読みとれることは、レーニンが歴史的に生起した種々の社会構造の異なるにつれて、異

った帝國主義の存在することを認めているということである。換言すれば、ローマの帝國主義は奴隸制度の社会に立脚し、現代の帝國主義は資本主義社会に立脚するから、それぞれ社会的地盤を異にするわけであり、したがってそれとこれとを区別することなく、ただ漫然と帝國主義として同一視することは、両者の相違点を抹殺する結果をもたらすがゆゑに、不当であるといふのである。この場合の用語例では、帝國主義はあらゆる時代を通じての一大帝國の建設をめざす政治的・軍事的行動を意味し、下部構造である經濟よりも上部構造である政治に力点がおかれているように見える。いづれにせよ、レーニン自身つねに帝國主義という言葉を一義的にのみ規定し、独占資本主義のシノニムとして使用していたわけでないことは、きわめて明かだといつてよい。

われわれはここでカウツキーを対置し、両者の相違点を比較しよう。カウツキーにあつては、帝國主義という言葉は、歴史的に限定された一定の時期すなわち一九世紀の七、八〇年代以降に妥当するものとされ、時代的制約を超越した帝國主義という概念は見当らぬ。彼は帝國主義を植民地主義または膨脹主義と同じ意味に使用することはしなかつた。帝國主義はたとえ対外的膨脹となつて発現しても、『前帝國主義的膨脹』とは、區別さるべきものであつた。彼のいうところによると、『國家の膨脹への衝動は、帝國主義にのみ固有のものではない。一八世紀の絶對王朝は、同じ衝動に駆られていた。それは國土を自分の領地と見ていた』。人民は國家行政に容喙することができなかつた。彼らの國籍はなんの役割をも演じなかつた。領主が努力したのは、自分の國を大きくし、整備することであり、彼れの國境は、他の諸侯の優越した武力のなかにのみ見出された。力の推移は國境の推移に導くことを意味したが、それとともに戦争の可能性をも意味した。『高度に發展した交通制度をともなう近代産業資本主義の發生が、近代的民主主義と近代的國民運動をつくりだすまで、この戦争は終りを告げなかつた』。そして近代的

民主主義と近代的国民運動は、国土を領土の領地から国民の領土にかえようとした。各国民は彼らの領土を意のままに支配することを主張した。それとともに各国に一定の国境を与えられ、この国境をこえて進もうと努める試みは除かれた。一九世紀の末にはじめて帝国主義の時代がやってきた。帝国主義的列強は、原始的農業地域を相ついで併合した。ナシヨナリズムは国民の独立をめざす運動から、一転して国民の支配をめざす運動となった。

要するにカウツキーにあつては、帝国主義と帝国主義的政策とは同義語として使用されている。それは高度資本主義の段階に照応する関税政策・植民政策などのすべてを含む。帝国主義的政策は、『資本主義の発展したあらゆる国の政策では本来なくて、資本主義的大国の政策にはかならぬ』(Der imperialistische Krieg, Neue Zeit, 1917, S. 460~481. 波多野真訳『帝国主義論』昭和二八年第三章)。

## 五

レーニンの著作の中には、軍事的・封建的帝国主義という用語がときおり出てくる。しかし、その明確な概念規定は与えられていない。これと関連があると想定される章句を、まず第六章から引用しよう。『前述の六国の中には、一方に若くて非常に急速に進歩しつつある資本主義諸国(アメリカ・ドイツ・日本)があるかとおもうと、他方に最近では右の諸国に比べてすこぶる遅々たる進歩をしているところの、古くから資本主義的な発達をとげた諸国(イギリス・フランス)があり、そして最後に経済的にもっとも遅れているところの、またそこでは近代的資本主義的帝国主義が、いわば前資本主義的な諸関係の特にこまかい網の目で蔽われているところの国(すなわちロシア)がある』。つまりレーニンは、第一次大戦当時における世界の六大強国を三つのグループにわけ、帝政ロシア

をば、『経済的にもっとも遅れた国』、『近代的資本主義的帝国主義がいわば前資本主義的な諸関係の特にこまかい網の目で蔽われているところの国』として特徴づけたのだが、まず注意をひくのは、日本をアメリカやドイツと同じように『若くて非常に急速に進歩しつつある資本主義諸国』の中にいれ、帝政ロシアとは別に取扱った点である。そうだとすると、日本は経済的にもっとも遅れた国でもないし、近代的資本主義的帝国主義が資本主義的な諸関係の特にこまかい網の目に蔽われている国にも属しないということになる。分類の基準は、経済の発達程度におかれていろいろしいが、ともあれ日本が帝政ロシアとは別の部類にいれられていることは、たしかだ。しかし他の論文『帝国主義と社会主義の分裂』の中には、日本と帝政ロシアの相似性を指摘した箇所も見られる。『日本およびロシアにおいては、今日の近代的金融資本の独占が、軍事的権力の独占によって、広大な領土の独占によって、国内に生活している異民族を略奪し、中国その他を略奪するため特に恵まれた諸事情を独占することによって、一部は補足され、一部は代用されている』(Samliche Werke, Bd. XIX S. 389)『帝国主義論』国民文庫二〇一ページ)。以上に引用したかぎりでは、封建的という形容詞は、まだ出てこない。

それはさておき、『近代的資本主義的帝国主義が、いわば前資本主義的諸関係の特にこまかい網の目に蔽われている国』とは、いったいどんなことを意味するのであろうか。本質的には独占資本主義の国だが、表面は、前資本主義的な諸関係のベールをかぶっている国というほどの軽い意味なのか。それとも独占資本主義が、前資本主義的な諸関係によってがんじがらめに縛られ、伸び悩んでいる国という意味なのであろうか。右の一句だけでは、軽々に断定をくだしがたい。しかも帝国主義論の中には、あとにもさきにも、これに類する章句はないのである。

そこでわれわれは、ほかの論文に眼を転ずることにしよう。わたしは、とくに重要とおもわれる二つの論文に注



目したい。それらは問題をとく鍵を与えるように考えられるから。『ロシアにおいては、最新型の資本主義的帝国主義が、ベルシャ・満州・蒙古にたいするツァーリズムの政策の中に、その完成された表現を見出したとはいっても、だいたいいにおいて、ロシアでは軍事的・封建的な帝国主義が優勢を保っている。』『世界中どこでも、ロシアほど国内総人口の過半数が抑圧されているところはない……ツァーリズムは、国内において増大しつつある不満から注意をそらし、かつ高まりつつある革命運動を抑圧する手段を戦争の中に見出してはいる。……他民族を制縛し、搾取しつくすことができるということは、経済的停滯を強めるものである。なぜなら、生産力の発展の代りに、『異民族』の半封建的搾取が利潤の源泉として現れることが、稀ではないからだ。かくて戦争は、ロシアの側からいうと、明確に反動的で、自由に反するような性格を担っている』(Sämtliche Werke, Bd. XVIII, S. 255~6『社会主義と戦争』国民文庫 八五―六ページ)。これは『社会主義と戦争』の一節であるが、同じような章句は、『第二インターナショナルの崩壊』の中にも出ている。『周知のごとく、ロシアでは資本主義的帝国主義はより微弱だが、その代り軍事的・封建的帝国主義はより強大である。』(Sämtliche Werke, Bd. XVIII, S. 336, Fussnote, 『第二インターナショナルの崩壊』国民文庫 五九ページ)。

以上、二つの引用から、われわれはつぎのような判断に到達することができるようにおもふ。資本主義的帝国主義という概念と軍事的・封建的帝国主義という概念は、別個の範疇に属すること、帝政末期のロシアにおいては、これら二つの帝国主義が現実からみあっていたこと、しかも軍事的・封建的帝国主義が資本主義的帝国主義よりおおむね優越していたこと、等々。そしてもしこうした解釈が誤っていないとしたら、さきに提起した疑問も、おのずから解決に近づくのではあるまいか。すなわち『近代的・資本主義的帝国主義がいわば前資本主義的な諸関係

の特にこまかい網の目で蔽われている』うんぬんというのは、軍事的・封建的帝国主義と近代的・資本主義的帝国主義の癒着をさすものであり、しかも前者が後者に比べて優勢を保っているということを意味するものではなからうか。帝政ロシアにおいては、前資本主義的な土地貴族の勢力が資本貴族のそれよりも強大であり、後者の主体性をはなはだしく制約していたことは、紛れもない事実であつたとおもわれる。

G・D・H・コールの見解によると、一九世紀および二〇世紀の帝国主義的傾向をこごとく経済的条件によつて説明することは、誤りである。もちろん経済的要因は重要であつたとはいへ、ただそれだけに止まるものではなかつた。それらの要因とならんで、帝国主義的膨脹をめざす古い軍国主義的進出が狙けつをきわめ、若干の国々では、経済的諸要因が、国家を促して潜在的な経済的価値の新しい征服に駆りたてる諸勢力に劣らず、国策の道具たるに十分であつた。しかし、帝政ロシアのアジアにおける大々的な膨脹が、市場や原料源泉や余剰資本の投資先を求めろロシア資本家たちの圧力によつて、説明しえないことはたしかだ。ロシアにおける資本主義は、支配的な影響を發揮するに足る強い力をほとんどもたなかつたし、極東地方へのロシアの進出は、経済的な誘因よりも、軍事的な力という条件によつて、より多く説明することができる。ドイツの帝国主義でさえ、実際のところ、経済的要因だけで説明することはできない。ドイツにおいては、軍国主義の力と資本主義の力との結びつきが、帝政ロシアより遙かに複雑であつたとはいへ、中欧・東欧における覇権をねらうドイツの進出は、たとえ大いに経済的な手段を利用したとしても、市場の探求によると同じく、民族主義・軍国主義的な感情によつて存分に鼓舞されたのである。『帝国主義は資本主義よりもずっと古いのであつて、一九世紀において新しい形態をとつたとはいへ、またマルクスのいわゆる「生産力」の変化に深く影響されたとはいへ、古くからの権力熱、古くからの軍国主義的衝動こ

それが、あらゆる国民、とりわけその支配階級に影響をおよぼした。日本およびドイツにおけるごとく、それは独占資本主義が軍国主義的膨脹主義の同盟者または補助者になった時に、単に援助されたにすぎなかった』(Introduction to Economic History 1750-1950, 1952, p. 104-5)。

以上のような見解は、とくに目新しいものとおもえないが、それにも拘らず、当面の問題に多くの示唆を与え、共感を覚えさせるもの少しとしないであろう。いずれにせよ、帝国主義を独占資本主義と同一視し、それだけで歴史の進行を説明しようとするやり方が、無理であることはたしかである。さきに見たとおり、レーニンはアメリカ、ドイツおよび日本を同じグループにいれ、ロシアだけを切りはなして別扱いにしている。しかし、ドイツや日本が、いわゆる封建的遺制を多量に抱えていたのに反して、アメリカはそういうものをほとんど有しないことを、われわれは見失ってはなるまい。アメリカは、いわば資本主義が純粹に培養された国だ、といってよからう。資本主義が驚異的なテンポで躍進したかぎりにおいて、なるほどアメリカはドイツおよび日本と共通点をもつにちがいない。しかし他の半面では、封建的遺制を多量にもつドイツおよび日本と大いに異なるところがあり、これを無視して同格に取扱うことは、許されぬのではなからうか。わたしは、レーニンのこの取扱いにたいして、一抹の疑問をもつ。

—一九五九・五・二〇—